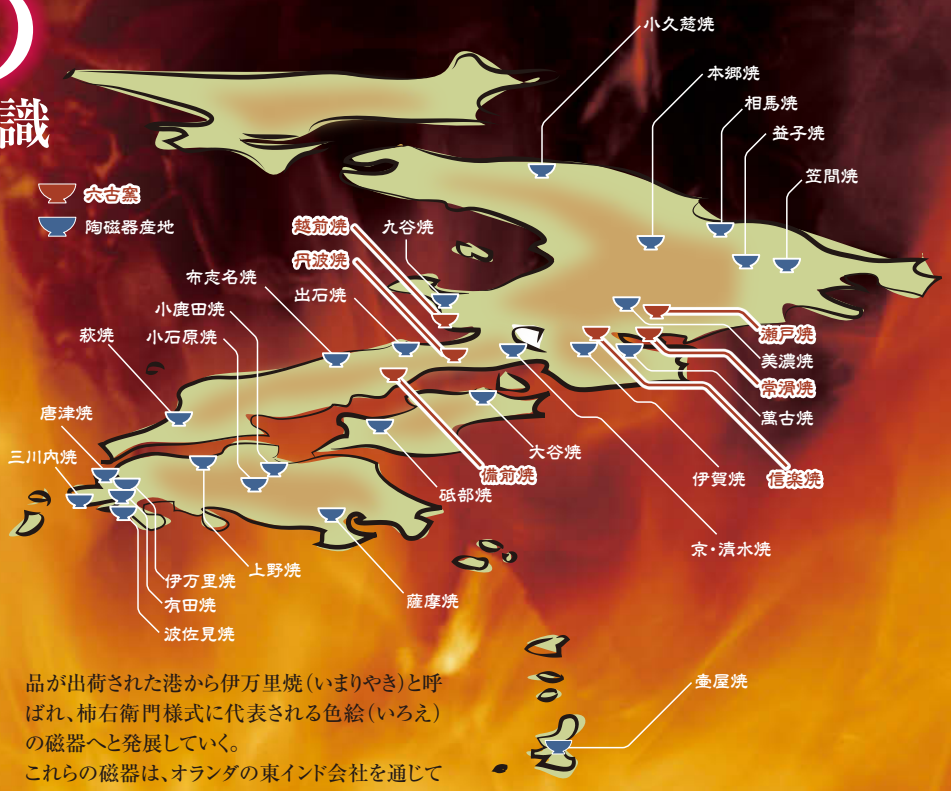
知っておきたい やきもの 豆知識

日本では約1万2000年前の、世界最古ではないかと言われる土器が発見されていることから、日本のやきものは世界屈指の歴史をもってると考えられている。
それらの土器は縄文式土器と呼ばれ縄のような紋様とダイナミックな造形が特長。その後、弥生式土器が現れ、古墳時代の土師器（はじき）へと続く。
それらに対して、古墳時代の中ごろから、硬質で灰色をした須恵器（すえき）が登場。
飛鳥時代後半の、白鳳（はくほう）文化時代には、新たにガラス質の釉薬（ゆうやく、うわぐすり）をほどこした緑釉陶器が生産が始まります。
平安時代に入ると、須恵器の壺や甕（かめ）・鉢などの容器類が中心となる。また新たに、高い温度で焼かれた、緑白色の釉をかけた灰釉陶器（かいゆうとうき）も、作られた。
その後、鎌倉・室町時代には、瀬戸・常滑・越前・信楽・丹波・備前など、現代でも有名な焼き物の産地で、生産がおこなわれるようになる。これらも産地を総称して六古窯と呼ばれている。
瀬戸などで灰釉や鉄釉をほどこす焼き物は作られるものの、一般には釉がかけられない焼き物が主流となる。
安土・桃山時代には、千利休、古田織部などの茶人により茶道が確立。従来の産地でも焼〆、楽焼、京焼、黄瀬戸、織部などで茶陶がさかんに焼かれ唐物とともに珍重された。
豊臣秀吉の朝鮮出兵により日本に陶工達が連れて来られ、九州肥前で有田焼の前身となる磁器の生産が始まる。製品が出荷された港から伊万里焼（いまりやき）と呼ばれ、柿右衛門様式に代表される色絵（いろえ）の磁器へと発展していく。
これらの磁器は、オランダの東インド会社を通じてヨーロッパを初めとする海外へも輸出され、王侯貴族のコレクションに収まるなど珍重された。
明治以降は重要な輸出品として、各地で洋陶も焼かれるようになり現代に至る。



陶磁器の種類など

土 器
素焼きのやきもの。700～900℃の温度で焼成。彩色されているものもあるが、その場合は、その彩色具を釉薬としないことを前提としている。歴史的には陶磁器の前身にあたる。

炻 器
せっきと読み英語の"Stoneware"の訳語。焼成温度は1200～1300℃。須恵器が起源。備前焼や常滑焼などが炻器に分類される場合がある。
これらの焼き物は「焼き締め」ともいい、釉薬はかけないが焼成において自然釉がかかるものがある。軽く打つと澄んだ音がする。吸水性はほとんどない。

陶 器
粘土を原料とし、窯で1100～1300℃の温度で焼いたもの。釉薬を用いる。透光性はないが、吸水性がある。厚手で重く、指ではじくと柔らかい音がします。

磁 器
磁器は半透光性で、吸水性が殆どない。また、陶磁器の中では最も硬く、軽く弾くと金属音がする。粘土質物や石英、長石→陶土を原料として1300℃程度で焼成する。指ではじくと澄んだ音がする。
有田焼や九谷焼などが有名。白地を活かして、染付けや赤絵などを施される場合が多くみられる。
また、ボーンチャイナは乳白色の温かみのある素地で高級品とされています。

陶磁器の呼び方
やきものの総称として畿内より東では瀬戸物「せともの」と呼ばれ、中国、四国以西では唐津物「からつもの」とも呼ばれる。

下絵付けと上絵付け

染 付
染付とは、白色の胎土で成形した素地の上に呉須と呼ばれる酸化コバルトを主とした絵の具で模様を絵付し、その上に透明釉をかけて高温焼成した陶磁器。模様は藍青色に発色する。透明釉の下に発色層がある釉下彩技法の一種。 絵付けの上に釉薬がかかるので、大変堅牢な絵付け法。

赤 絵
明代の景徳鎮で盛んになった、赤、緑、黄、青、黒（諸説有り）の釉薬で彩色した陶磁器で、「万暦赤絵」が特に有名。
絵柄は白磁の余白を生かしたものから、色彩で埋め尽くされた豪華絢爛なものまで多彩です。
染付とともに赤絵は朝鮮を経て日本にも伝えられた。

成型法

手びねり
手びねりは最初期から存在した手法である。球、紐（紐作り）などの形をした粘土を手でこねて形を作る。他に、板状に伸ばした粘土（タタラ）をつなぎ合わせたり皿状に成形するタタラ成形や、中をくり抜いた粘土塊をつなぎ合わせるくり貫きといった手法がある。

ろくろ
轆轤による成形では、粘土の球が回転台の中央に置かれ、急速に回転する轆轤の上で、柔らかい粘土の球が形を整える。
轆轤により一定水準の器を作るためにはかなりの技能と熟練を要し、高い芸術的価値を持つ作品も作り出せる。

練り込み
異なる陶土を成形する前に練り込んでロクロなどで成形すると、独特の模様が生まれる。

さまざまな釉薬

灰 釉
灰釉（かいゆう）は、日本の平安時代に灰釉陶器として生産された、植物灰を使った施釉陶器。緑釉陶器と共に、人工的に施釉された陶器として国内最初期のものに位置づけられている。

緑 釉
酸化銅を呈色剤とする緑色の釉(うわぐすり)。唐三彩の華麗な色釉の一つ。日本では7世紀後半にその技術が伝えられ,8世紀には畿内一帯で緑釉陶器が製作された。日本の織部陶のように,高い温度で焼成される緑釉は,透明釉に銅を5%ほど加え酸化炎焼成したもの。

黄瀬戸
黄土色の色合いは、鉄分を加えた素地を酸化焔という酸素を多く含んだ炎で焼成することによってつくられます。
深緑の胆礬（たんばん）と呼ばれる景色が付くことが一般的。

瀬戸黒
瀬戸黒は、桃山時代に生まれた茶陶の制作技法。釉は土灰に鬼板(おにいた)(酸化鉄、マンガンなどを含む天然材料）等を合わせた鉄釉で、深みのある漆黒の釉調に特色がある。

志 野
志野焼（しのやき）は、安土桃山時代に焼かれた白釉を使った焼物。赤志野や鼠志野などいくつかの種類があります。鉄分の少ないやや紫色やピンク色がかった白土を使った素地に、志野釉（長石釉）と呼ばれる長石を砕いて精製した白釉を厚めにかけ焼かれる。

織 部
透明釉薬に酸化銅などの銅を着色料として加え酸化焼成したものを「織部釉」と言います。
織部黒・黒織部、青織部、赤織部、志野織部などがあるが、緑色の青織部が最も有名。歪んだ形の茶碗や、市松模様や幾何学模様の絵付けなど、特徴的な形をしたものが多い。

陶磁器の産地

六古窯の特徴
六古窯とは、中世から現在まで生産が続く代表的な六つの窯の総称。朝鮮半島や中国からの渡来人の技術によって開始された近世からの窯から区別される。

越前焼
福井県丹生郡越前町で焼かれる。高温で焼成されるときに薪の灰が器に流れ出し、溶け込む自然釉の風合いで知られる。

丹波焼
兵庫県丹波篠山市近辺で焼かれる陶器。主に生活雑器を焼いてきた。丹波焼、または立杭焼ともいう。民芸調の作品が多く見られる。
平安時代末期から鎌倉時代が発祥といわれ、焼成中に炎の当たり方によって一品ずつ異なった表情を生み出すのが特徴。 茶器の分野においても数多くの銘器が生み出されました。

備前焼
備前市伊部地区で盛んであることから「伊部焼（いんべやき）」との別名も持つ。室町から桃山にかけて茶道の発展とともに茶陶としての人気が高まる。釉薬を一切使わず「酸化焔焼成」によって堅く締められた赤みの強い味わいや、「窯変」によって生み出される模様が特徴。

信楽焼
温かみのある火色の発色と自然釉によるビードロ釉と焦げの味わいに特色づけられ、“わび・さび”の趣を今に伝えている。中世より壺、甕、擂鉢などの焼き物づくりが始められ、室町・桃山時代以降、茶道の隆盛とともに「茶陶信楽」として茶人をはじめとする文化人に親しまれ、珍重されてきました。

瀬戸焼
瀬戸焼は、愛知県瀬戸市とその周辺で生産される陶磁器の総称。10世紀後半に灰釉陶器生産が開始。茶器が茶の湯の隆盛に伴って多く焼かれ、日用雑器も作られるようになり隆盛を極める。
文化年間（1804年-1818年）加藤民吉親子が有田から染付磁器の製法を伝えたことから磁器の製造も始まる。
日用食器、ノベルティから作家物まで幅広くつくられています。

常滑焼
灰釉陶器の伝統にはない大型の甕や壺を新た創造することで瓷器系中世陶器の主要生産地となりました。
文政年間には急須と朱泥の生産もはじまります。
一方、 江戸末期には土樋（どひ）とよばれる土管が登場、明治以降は規格化された土管となり日本のインフラを支えます。

美濃焼と有田焼
隣接する瀬戸から陶工が美濃の地で焼物作りを始めたのが美濃焼の始まり。その後発展を続け今では全国の陶磁器の約半数をこの地で焼かれています。
一方、有田焼きは、肥前の藩主が朝鮮より連れ帰った陶工に陶磁器を創らせたことが始まりです。以来、有田、三川内（長崎県）、波佐見（長崎県）などで焼かれた肥前の磁器は、江戸時代には積み出し港の名を取って「伊万里」と呼ばれていました。